

ミヤ・アンドウ (Miya Ando) : David Lynch Foundation インタビュー動画

■アンドウの創造性、制作過程について

ミヤ・アンドウはこの動画の最初で、彼女の創作への姿勢を語っています。

「大事なものはなによりも誠実であること、そして最も純粋なやり方で形にすることです。それは私の基本的な考え方であり、生き方そのものでもあるのです」

(Creativity is so much about honesty and executing that in the most pure way you know how. I think it's a way of thinking and a way of doing and being)

そしてアンドウは、彼女の主要な作品である、金属のパネルを使用した平面作品について言及しています。

「私はまだ誰も実行していない新しいこと、新しい技術を創造することを楽しんでいます。手作業で金属を染めるこの方法はまったく新しいものです」

ここでアンドウは、‘手で染める (dyeing the metal by hand)’ という表現を使っていますが、ほかにも金属に色を施す工程には化学変化を用いることもあり、例えば銅の場合、酸化して緑青 (青緑色) となり、表面上の色となっていくという説明をしています。

「完成までには、20～30もの酸化などによる化学変化の層や、顔料などの層が施されます。こうしたあるものが別のものになる、‘冶金*の技術を使った魔法 (アンドウはここで metallurgical alchemy** という独特の言葉を使っています)’ を私は気に入っています」

* 鉱石から金属を取り出し、精製する技術。広くは、取り出した金属を合金にしたり、加工したりする技術も含まれる。
(小学館「デジタル大辞泉」より)

** metallurgical : 冶金の / alchemy : 錬金術、秘法、魔法

■アンドウの語る光の美しさ

アンドウの個展が開かれたギャラリー内のインタビューでは、彼女の興味がその出自に関連していることを示唆しています。それはアンドウがアメリカ人と日本人の両親をもち、日本人の血筋に刀鍛冶だった先祖がいたということです。

「私は金属のなかに潜む光に大変興味があります。こうした光を反射する素材を扱うことにとても興味があるのです」

その上で、作品 ‘Hamon’ についてその意味を語っています。

「刀文とは、刀の刃についた雲のような模様のことです。刀の工程である加熱、鍛練、焼き入れの後に現れる模様です。ひとつの刀身に非常に硬い部分とやわらかい部分ができ、そこにこうした美しさが表れてくるのです」

続いてアンドウは独自の美学や世界観を語っています。

「無常とは、万物は永遠ではないという考え方です。私は、恒久性を示唆する硬質な材料（鋼鉄、アルミニウム）を作品の素材として選択しました。そしてそこに、とてもはかない光と抽象性を創り出します」

「相互に考えが結びつき、すべてが変容する存在であると認識すること自体に、美しさがあります。それは一度の経験ではなく、今ここにあることを常に気づかせてくれるのです」

■アンドウが表現する「瞑想」としての作品

アンドウにとって瞑想はとても大切なものであると同時に、制作の根本的な原動力ともなっています。それについて、以下のように語っています。

「私にとって作品は精神世界を表現するものであり、制作活動は瞑想への手段でもあるのです」

「瞑想では、あなたが誰であるかということを知るために、あなたの根っことなる奥深いところまで意識を徐々に落としていきます。そこに、あなたの存在そのものがあるのです。瞑想は静けさを取り戻すためにとても重要です。そして私にとっても、筆や顔料や染料によって作品をつくるように、私が私であるためにもとても重要なことなのです」

「私は瞑想的な作品を発表し、それはどんな文化圏の人であっても普遍的なものであり、自分のなかにある何かを見つけ出すための手助けになると考えています」

-

このインタビューでは断片的ではありますが、アンドウの制作コンセプトを自身の言葉でいねいに伝えています。皆さまのアンドウ作品の理解に結びつくことを願っています。